

明治期小学生の中途退学に関する考察・Ⅱ

—前稿の要約と本稿の課題—

前稿でも述べたように和徳小学校は「学制」頒布の翌明治六年（一八七三）に青森県弘前に創立された歴史の古い学校で、しかも古くからの資料がかなり現存しているところから研究者の間でも注目されている学校のひとつであるが、『入退校簿』と称する資料は同校の明治二年（一八八八）から二八年（一八九五）に至る八年間の、各年度別、男女別の入学者、退学者（年度によっては卒業者も含まれている）の名簿である。⁽³⁾したがってこの資料によって明治二〇年代における和徳小学校生徒の中途退学の実態を明らかにすることが出来るわけであるが、下表（表1）は、その各年度別の入学者、退学者、卒業者数の一覧表である。

この表を一見して当時中途退学者がいかに多かったかということが先ず痛感されるであろう。同じ和徳小学校資料のなかに『記録簿』と称するものがある。同

麻生千明

年度		明治	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年
内訳										
入 学 者 数	男		109	82	92	79	88	67	(11)	53
	女		38	45	50	47	61	51	(5)	57
	計		147	127	142	126	149	118	(16)	110
退 学 者 数	男		28	30	40	29	22	13	25	24
	女		19	23	20	17	15	10	33 *	26
	計		47	53	60	46	37	23	58 *	50
卒 業 者 数	男				48	63	67			
	女				19	17	22			
	計				67	80	89			84

(和徳小学校『入退校簿』より作成)

(註)

1 簿の「入退校簿」は各年の名簿の末尾に合計の○名簿の通し番号が重複してたり、欠落が重なり、記載されていたり、簿の一致しない場合がある者の数とこの表ではない場合に記さるた者の数を名簿に記なお各年とも一月から一二月までの数である

2 明治七年の入学者名簿には表記の数だけで「余学籍簿」に在り」と朱書されてくる。ここにある書は恐らく転入生の数かと思われる

3 明治二年の名簿は男女別に断つておらず、名前から判らぬ卒業生も通し番号に含まれて十二マテ卒業一〇九十九マテ卒業と記されて四名の判らない女別人数は判らない

載。拙稿（註(1)）掲載の表より転
るが、数字のおよ*の数字はその時の表
一名が女子名簿に記入しても間違つて
（重複して）訂正したものと
（重複して）訂正したものと
である。以下表2、表3の*に
ついては同様である。

表2 和徳小学校中途退学者理由別内訳数(男女別)

(男生徒)

年度	退学理由 転居(転校)	家事都合	見習関係				病 氣	死亡(病死)	欠 席 除 名	不明(無記入)	合 計
			商 法 見 習	工 業 見 習	職 業 見 習	家 事 見 習					
明治21年	9	0	4	2	0	1	0	0	註(1) 10	2	28
〃 22年	13	註(2) 4	1	0	5	0	0	2	0	5	30
〃 23年	15	註(3) 6	1	0	14	0	1	0	0	3	40
〃 24年	12	10	0	0	5	0	0	2	0	0	29
〃 25年	13	0	1	1	0	0	2	1	0	4	22
〃 26年	10	0	0	0	0	0	0	2	0	1	13
〃 27年	13	0	0	0	0	0	0	0	0	12	25
〃 28年	17	0	0	0	0	0	0	2	0	5	24

(女生徒)

年度	退学理由 転居(転校)	家事都合	見習関係			女 学 校 入 学	死 亡 (病 死)	欠 席 除 名	不明(無記入)	合 計
			裁 縫 見 習	職 業 見 習	家 事 見 習					
明治21年	4	2	2	1	1	0	2	6	1	註(4) 19
〃 22年	6	4	10	0	0	3	0	0	0	23
〃 23年	11	5	4	0	0	0	0	0	0	20
〃 24年	3	註(5) 11	3	0	0	0	0	0	0	17
〃 25年	7	0	6	0	0	0	1	0	1	15
〃 26年	9	0	0	0	0	0	1	0	0	10
〃 27年	3*	0	0	0	0	0	0	0	30	33*
〃 28年	13	0	0	0	0	0	0	0	13	26

(和徳小学校『入退校簿』より作成)

校教員が毎日交番で「巡視番」を定め、学校内外の様々の事について気づいたこと、所感などを記録したものであるが、『明治廿一年六月 記録簿 和徳尋常小学校』と標記した明治二十一年(一八八八)の記録簿の七月一日(金曜)の欄に「今ハ退学ノ弊ヲ説ク好機會ナリト思ハル懇々切々児童ノ腦裏ニ感染セシムベシ」(巡視番 岩庭訓導 三浦訓導)との記述がみえるし、また『明治廿二年一月 記録簿 和徳尋常小学校』と標記した明治二十二年(一八八九)の記録簿の七

月四日(木曜)の欄には「入退校アル都度其生徒姓名ヲ扣所ノ黒板ニ書シ生徒ニ知ラシムルハ親密ノ情ヲ養フ一手段ニハ御座ラヌカ」(巡視番 下沢訓導 山中訓導)といった記述などがあり、統出する退学生徒への対応策に腐心している同校教員の様子が窺われる。

次表(表2、3)は『入退校簿』をもとに同校生徒の中途退学者数を理由別に表示したものである。

註(1) 名簿では欠席除名が十二名おり、

そのうち二名は朱線が引かれ、上欄に「再出」と朱書されている。恐らく一旦除名された者が再出校するようになったのであろう。

註(2) 「家事都合」と記された四名のうち一名は、カッコ付で「職業見習」とも付記されている。

註(3) 六名のうち五名は当初「授業料不納ニ付出校差止ラル」と記されたのが朱線がひかれ「家事都合」と訂正されている。

註(4) 名簿では二〇名となっているが、うち一名「四年 花田つな」は九月一日付「欠席除名」と記入され、朱線が引かれ再び一月二日付「裁縫見習」と記されており、二重に数えられている。本表では「裁縫見習」の方のみ計上している。

註(5) 一名のうち一名は「家事多忙」と記されている。

表2、3とも拙稿(注(1))より転載。なお*については表1の註記参照。

表3 和徳小学校中途退学者理由別内訳（男女計）

年度	理由	転居・転校	家事都合	見習	その他	合計
明治21年		13	2	11	21	47
" 22年		19	8	16	10	53
" 23年		26	11	19	4	60
" 24年		15	21	8	2	46
" 25年		20	0	8	9	37
" 26年		19	0	0	4	23
" 27年		16*	0	0	42	58*
" 28年		30	0	0	20	50
合計		158*	42	62	112	374*
百分比		42.3*	11.2	16.6*	29.9	100.0

多く（四二・三％）、次いで「見習」による退学（一六・六％）そして「家事都合」「その他」と続くことが明らかにされた。

以上、前稿においては『入退校簿』の記述にしたがって和徳小学校生徒の中途退学の理由別内訳を明らかにしたのであるが、その各個別理由の中味や実態および相互関連についてさらに考察を進める必要があるように思う。そのことによつて当時小学生の置かれた状況というもののについての理解が深まるものと思う。そこで先ず本稿では退学理由の第一位を占めていた転居、転校の実態、転居の理由や背景等について考察することにする。

一、転入の実態

（一）和徳小学校入学生の学年別内訳

明治以後の小学校の前身、母体ともなった近世江戸時代の寺子屋に関して、「入学者ハ概ネ初メテ入学スル者ノミニシテ且転学者モ甚タ少キヲ以テ……」との指

表2は『入退校簿』

の退学理由の記述に従つて男女別に表示したものであり、退学理由の分類もより詳細になっている。表3は、その退学理由を「転居・転校」、「家事都合」、「見習」、「その他」の四項にまとめ男女合計数で表示したものである。これにより和徳小

学生徒は「転居・転校」による退学が最も

摘もあるように、寺子屋の児童（寺子）は概ね最寄の寺子屋に入門し通学するの

が普通で、しかも途中から他の寺子屋に転学するということは極めて稀なことであつたと思われる。封建的身分制原理の支配する近世社会にあつて人々はそもそも職業選択や住居移転の自由が与えられておらず、自分の生まれついた身分、家柄、居住地等に終生拘束されていたわけであるから転学につながる転居そのものがあまり無かつたと考えられる。寺子屋の師匠自身もその土地の人であり、師匠と寺子の師弟関係は、その家族をも含み込んだ緊密なもので、かつ数世代にもわたるものであつた。同じ近世の学校でも武家学校系統、例えば私塾の場合は広範に、そして藩校の場合も若干、藩などの地域的割拠性を越えて学問と師を求めてわたり歩く、いわゆる「遊学」がみられたのであるが、その点は庶民学校たる寺子屋と対照的であつたと言ふことが出来る。

そうした近世の寺子屋と異なり近代明治以後の小学校においては生徒の転居、転校というケースが俄然多くなる。明治二〇年代の和徳小学校における中途退学者の四割以上が転居、転校によるもので、理由のなかでトップであつたことはすでに指摘したところであるが、全国のなかでも青森県は特に「転籍」や「寄留」等による生徒の転校が多かつたものと思われる。明治一五年（一八八二）の「青森県年報」に次の指摘がある。

「学齡就学ノ男二万五千六百六人ニシテ前年ヨリ千六百七十二人女四千六百九十九人ニシテ同上千百十九人合二千七百九十一人ヲ増シ不就学ノ未修学ハ前年ヨリ減スルヲ男千八百五十七人女二千六百十八人而シテ如此其増減アル所以ノ者ハ蓋学齡ニ出入アリ又転籍寄留等ニ関スルヲ以テナリ」(傍点引用者)

和徳小学校生徒の場合も転籍や寄留のケースが少なくなつたことについては後述する如くであるが、先ず和徳小学校における転入の実態について考察してみることとする。

和徳小学校への入学者の中には新入生のみでなく他校からの転入生もかなり含まれていたと思われる。ちなみに『入退校簿』の入学者名簿をもとに明治二十一年（一八八八）から二十八年（一九一五）に至る各年度の入学者の学年別内訳は次表

表4 和徳小学校入学者の学年別・男女別内訳

年度 学年・性別		明治 21年	〃 22年	〃 23年	〃 24年	〃 25年	〃 26年	〃 27年	〃 28年	合計
1 年	男	83	63	74	68	74	57	(5)	44	468
	女	35	43	39	41	55	48	(3)	47	311
男女計		118	106	113	109	129	105	(8)	91	779
2 年	男	10	7	8	3	6	4	(0)	5	43
	女	1	1	5	3	4	1	(0)	2	17
男女計		11	8	13	6	10	5	(0)	7	60
3 年	男	8	4	3	3	3	1	(6)	3	31
	女	2	1	2	3	1	2	(0)	6	17
男女計		10	5	5	6	4	3	(6)	9	48
4 年	男	8	8	7	5	5	5	(0)	1	39
	女	0	0	4	0	1	0	(2)	2	9
男女計		8	8	11	5	6	5	(2)	3	48
合計	男	109	82	92	79	88	67	(11)	53	581
	女	38	45	50	47	61	51	(5)	57	354
男女計		147	127	142	126	149	118	(16)	110	935

(和徳小学校『入退校簿』より作成)

(表4)の如くである。

(補註) 各年度の入学者名簿の末尾には大抵「合計〇〇名」と記されているが、実際名簿に記載されている人数と一致しない場合が多い。例えば二一年男子は「合計百七名」とあるが、名簿上の通し番号の「六十七号」と「六十八号」が重複しており実際は百九名。二三年男子は「合計九十一名」となっているが通し番号がひとつ欠落しているが名簿上は九十二名。二四年男子は「合計七十九名」を訂正して「八十名」と記されているが名簿上は七十九名。女子も同じく「合計四十七名」を訂正して「四十八名」となっているが名簿上は四十七名。二五年男子は「合計七拾八人」とあるが通し番号が「第二拾二」の次「第拾三」となっているが名簿上は八十八人。二六年男子も通し番号は六五で終っているが、三七、三八が重複している人数を記した。したがってこの表ではあくまでも名簿上に記載されている人数を記した。なお二八年の名簿は男女別になっていないが、名前から判断して男女別人数を記した。

すなわち入学者の学年別内訳をみると二年以上の入学者が九三五名中一五六名で約一六・七%を占めている。二年生以上の入学者は概ね他校からの転入(編入)者であると判断すべきであろうし、また当然一年生のなかにも他校からの転入生もかなり含まれていたであろう。ところで『入退校簿』の入学者名簿には、他校からの転入の旨が記されている場合もあるが、むしろ何も記されていないのが大部分で、註記してある者のみが転入生の全てであるとは思われない。したがって『入退校簿』から把握しうるものは転入についてのある程度の実態であって必ずしもその全体ではないことを予めお断りしておきたい。なお和徳小学校の入学生徒に関しては『入退校簿』の他に次の如き「入校願」等の資料がある。(いずれも弘前市立図書館所蔵)

- ・ 明治二一年の入校願類(表紙欠)一冊。
- ・ 『明治十五年 入校願 一月ヨリ 和徳小学』一冊。
- ・ 『明治十八年生女入校願 一月 和徳小学』一冊。
- ・ 『入学願綴 和徳小学』(明治二十四年の分)一冊。
- ・ 『明治廿六年中 入校件』一冊。

すなわち右の資料は明治二一、一五、一八、二四、二六の各年度の「入校願」等の書類を綴じた簿冊である。(註、それら書類は「入校願」「入学願」「入校届」等々標記はまちまちなので、本稿においては便宜上「入校願」等と称することにする。)『入退校簿』と併せこの「入校願」等を資料とすることにより、和徳小学校への転入についての、より詳細な実態を探り得ることが期待されるのである。

ところで明治一一年から二六年に至るその「入校願」等の書式、文面には若干の変化がみられ、それらは各時期の教育政策や教育行政制度等を反映しているとみられるので、先ずその点についての考察を行っておきたい。

(一) 「入校願」等の書式、文面の変遷

- ① 表紙を欠落しているが明治二一年(一八七八)の「入校願」等、八五通綴じ

られた簿冊がある。このなかには恐らく休学していた生徒であろうか「出校願」のようなもの二通と蓬来小学校に提出された「退校願」一通が含まれているが、この年度の「入校願」等の書式、文面の一例を示すと次の如くである。

第七大学區第十五中学区 和徳小学校入校願
第三大區第一小區和徳町二十番地 商 善助二男
今 井 常 吉
七年一ヶ月
右者和徳小学へ入校仕度此段 相願候已上 明治十一年一月八日 届ケ済 學區取締御中

これは「学制」頒布の翌明治六年（一八七三）の青森県達「小学校則」に示された「入校願」の雛型が多分にモデルになっていると思われる。「小学校則」とは「学制」に則って文部省が作成したものを県が地方の実状等を参酌し独自に作成公布したもので、十二則から成るが入校に関しては「第九則」に「初メテ入校ヲ願フモノアラハ左ノ雛形之通書面ヲ認メサセ学区取締へ差出サシメ学区取締奥書印ノ上其入校ノ小学ニ廻達スヘシ小学コレヲ生徒名簿へ記録シ聞届ノ指令ニ小学ノ印ヲ捺シソノ下付スル事初メ出ス時ノ如シ」と述べたあと、次の如き入校願の雛型が示されている。

某小学校入校願
何大区何小区某村何番地借家ト記入ス 土族農長男 王 商某二女 苗字 名
雛形 料紙半紙

当何月 幾年幾月
右者某小学校へ入学仕度此段相願候以上
明治六年何月日
父兄苗字 名 印
学区取締
苗字 名 殿
奥書印式
前書入校願之趣相違無之候也
学区取締
苗字 名 印

ところで和徳小学校の明治十一年の「入校願」等の多くは「学区取締」宛てになっている。宛先毎の標記の内訳数を記すと「学区取締」：三三、「和徳小学掛」：五、「和徳小学」：七、「和徳小学校」：一六、「和徳学校」：二一、「和徳町学校」：一、で宛先の記載なしが一通あった。

なお学区取締とは「学制」期において教育行政面で大きな役割を果たした者で、青森県の場合、各中学区毎に土地居住の名望家の中から一〇ないし一二名を地方官が任命し、区内小学区二〇ないし三〇を分担させ、区内の就学勧誘、学校の設立、保護、経費、経営面に大きな力を振ったのであり、官庁からの命令、学校から官庁への伺い、届けなど全て学区取締を経由して行われたのであった。⁷⁾ そうした「学制」期の教育行政が「入校願」の宛名という面にも反映していたと言える。

② 次に「明治十五年 入校願 一月ヨリ 和徳小学」と標記した明治一五年（一八八二）の入校願綴が一冊ある。これは書式自体は明治一一年のものと同様ほど変わるところはないが、「願」の本文が例えば「右者御校に入学為致度奉願候然ル上ハ御規則等固ク為相守可中候也」というように、ほとん例外なく規則遵守の旨が盛りこまれている点に大きな特色がある。明治一三年（一八八〇）の「改正教育令」による中央集権的な督励主義、官僚統制の強化、儒教主義的徳育の強化といった政策動向が、そうした文面にも反映していると言える。

なお明治一二年（一八七九）に学区取締が廃止され学務委員や学校掛⁽⁸⁾が置かれるが、そうした行政制度の変化に対応し「入学願」等の宛先も学務委員宛が登場する。しかし数の上では学校宛が多くその内訳は次の如くである。

学校宛は「和徳小学」：八六、「和徳小学校」：一九、「和徳学校」：四、「和徳町小学校」：一、であり、委員宛は「和徳小学学務委員」：一六、「和徳小学委員」：七、「和徳学校委員」：五、他に「学校掛」：二、「和徳町事務掛」：一、なお既に廃止されたはずの「学区取締」宛てに記したものが二通（但し同一人のもの）、宛先無記のものが一通ある。

なおこの簿冊には一五年四月八日付、女子師範学校付属小学校に提出された「轉校願」一通、そして明治一一年の「入校願」四通混じっているが、その宛先内訳は「学区取締」：一、「和徳小学校」：一、「和徳学校」：一、となっている。

③ 『明治十八年^生入校願 一月 和徳小學』一冊。この簿冊には明治一八年（一八八五）の女生徒のみの「入校願」六一通が綴られている。うち一通は女子師範学校付属小学校に提出された「転校願」であるが、入校願の宛先内訳は「和徳小学」：一〇、「和徳小学校」：一一、「和徳学校」：一二、「学務委員」：二五、「委員」：五、「学務係」：一、なお「和徳小学学務所」と記したものが六通あり注目される。なお規則遵守等の旨を盛りこんだ文面、書式等は一五年のものとは同様である。

④ 次に『入校願綴 和徳小学』（二冊）とのみ標記された簿冊は明治二四年（一八九一）の「入校願」等で、一一七通の綴の中には朝陽小学校と進修小学校に提出し許可を得た「転校願」が各一通ずつ含まれている。願の文面は一五、一八年時のような規則遵守の旨は大抵省かれ、例えば「右ハ今般御校へ入校為致度候間御聞届被成下度此段奉願候也」というように極めて簡潔なものとなる。なかには「右ハ入学願上候也」とか「右入校奉願候也」といった簡単なものもある。

なお明治一八年（一八八五）以降弘前の各小学校に校長職が置かれるようになり、和徳小学校においては明治一九年八月に三上徳之助が初代校長に任ぜられることになるが、そうした校長職制の成立に対応してこの年の入校願には校長宛の

ものが多くみられる。すなわち「和徳尋常小学校校長三上徳之助殿」と記したものが二六通あるが、それ以外はいずれも学校宛で「和徳尋常小学校」：八六、「和徳町尋常小学校」：一、「和徳町尋常小学」：一、「和徳尋常小学」：一、無記一、という内訳である。なお同校の発展における三上校長の功績は甚大なものがあつたようである。彼の略歴、功績等について次に摘記しておきたい。

※初代校長三上徳之助の略歴と功績

安政四年（一八五七）二月生れ。明治七年和徳小学に学び同年変則小学に移る。この間和徳小学助手も勤める。九年一月青森県師範学校に入学。一二年八月本科卒業、同月訓導に補せられ南津軽郡教督（今の指導主事の如き職）、一四年二月朝陽小学校教員長、一五年七月師範学校三等教諭兼書記、弘前分校に在勤申付らる。一八年青森県女子師範学校雇教員、五月癸校の隠解職。九月中津軽郡公立中学校教員、一十月朝陽小学校校長兼和徳小学校に転じ一九年（一八八六）四月和徳小学校専任となる。八月学校組織変更の隠解職し更に和徳尋常小学校長に任ぜらる。二五年文部大臣より普通免許状を得。二八年（一八九五）八月在職中病死。履歴書にも「同氏当校ニ職ヲ奉ジテヨリ銳意改良ノ方法ヲ謀リ殊ニ校舍新築ノ如キハ殆ド氏ノ尽力ニ依ラザルハナシ當時我が校ノ隆盛ナルコトハ文部省視学官ナドノ賞言ニヨリテ地方ノ模範学校ナリトマデ言ハレシ程ナリ」と称賛されている。千葉寿雄氏も「本校（和徳小学校のこと）引用者註」が暗中模索の教育をしていた時代から、飛躍的に近代化された教育に発展したのも、三上校長の時代を先取りした明敏な識見に負うところが多かった。本校が、弘前市初等教育界の名門校として喧伝されるようになったのも、三上校長在任の十年間に、その基礎が築かれたのであった。…本校がその発展すべき時期に、三上校長のような卓抜した人物を得たことは、真に幸福だったといわねばならない」と激賞している。『小学校現場の百年』千葉寿雄 津軽書房 昭和五〇年 一八〇～一頁

⑤ 最後に『明治廿六年中 入校件』と標記した明治二六年（一八九三）中の「入校願」等の簿冊がある。願の文面は例えば「右者入校為致候間及御届候也」というように極めて簡潔なものとなる。なお「入校届」と標記したものが多く、標記別内訳を示すと、「入校届」：四二、「入校御届」：一五、「入校願」：五二、「小学入学願」：一、「入学願」：一、無記：四、というように「届」と記したものと「願」と記したものと大体半々である。

また宛先別内訳は「和徳尋常小学校」：七四、「校長三上徳之助」：一二一、と校長に宛てたものが多く、なお「和徳尋常小学校校長御中」というのが一通あった。その他、無記五、また朝陽小学校あての「転校願」が一通あった。

以上、「入校願」等の資料について文面の変遷や宛先内訳についてみてきたが、次にこれら「入校願」等および『入退校簿』を資料に転入の事例、実態について考察したい。

(三) 転入の事例、実態

「入校願」等の文面は、たとえ他校からの転入の場合であっても何らその旨が記されていない場合が多いが、なかには転入と判る場合がある。例えば明治一五年（一八八二）十一月一日付、小川フミの「入学願」には、氏名の上に「亀甲小学ニテ下等小学十級卒業」と記されており亀甲小学からの転入であることが知られる。また左の資料は明治一八年（一八八五）五月一三日付の赤平まつ（⁹）の「入校願」である。すなわちこれは弘前西川岸町五番地に居住する士族、赤平慶助の四女、赤平まつ（年齢九年一ヶ月）が明治一八年五月一三日に和徳小学校に提出した「入校願」であり、「右ハ是迄女子師範学校附属小学へ入学為致居處今般御校へ入校為仕度奉願候然る上ハ御校則堅ク為相守可申候也」との文面から

入校願

おきおきまつ
おきおきまつ
おきおきまつ

おきおきまつ
おきおきまつ
おきおきまつ

明治一八年五月一日付

赤平慶助

和徳小学校の校舎は

和徳小学校

り、「右ハ是迄女子師範学校附属小学へ入学為致居處今般御校へ入校為仕度奉願候然る上ハ御校則堅ク為相守可申候也」との文面から判るように女子師範学校からの転入であり、かつ「初等一入」との註記から初等科一年への入学であったと察せられる。末尾に

「許可 五月十三日」と朱書され五月一三日付で入学を許可されている。

なおこの女子師範学校についてであるが、明治初年において特に青森県は女子の就学率が極めて低いなかにあつて弘前のみはやゝ高い方であつた。そうした背景のもと女教員養成の必要から弘前に女子師範学校が仮設されることとなり、明治一一年（一八七八）に弘前の元寺町にあつた含英小学校に設置され、学費一切自弁で四〇名を限って募集が行われた。弘前女子師範学校の設置に伴い、明治一二年（一八七九）一月七日、含英小学校は女子師範学校附属小学校とされた。但し当初は附属代用校の如き扱いで正式に附属小学校となつたのは明治一三年七月のことである。

明治一五年（一八八二）十一月には女子師範学校の学則も出来るが、入学志願者の減少や落第者が相次ぐなど不振に陥り、一三年に一二名の卒業生を出して以後、絶えて卒業生をみない現状から県議会でも師範学校廃止の議さえ出るようになった。そしてついに県は明治一七年（一八八四）六月、財政逼迫の理由で各郡県立師範学校を廃止、同年一月には弘前師範分校も廃止となった。それに伴つて附属小学校も廃止となり、生徒は弘前内各小学校に転学させられたようであるが、先の赤平まつも、こうした師範附小の廃止に伴い転学を余儀なくされた生徒の一人であつたことが先の資料から察せられるのである。

以下、「入退校簿」を中心に、「入校願」等の資料を援用しつつ明治二一年（一八八八）以降の各年毎の転入状況について考察してゆきたい。なお特に明治二四年（一八九一）と二六年については「入校願」等と「入退校簿」を照合することにより、転入についてのより詳しい実状を探ることが出来る。また同一人物についても名簿の方に転入の註記があつても「入校願」等の方には何らその旨の記述がなかったり、またその逆の場合もある。

先ず明治二一年（一八八八）の「入退校簿」の入学者名簿には男女いずれも転入の旨の記述は全く見られない。

次に二二年（一八八九）の入学者名簿をみると、女子については転入等の記述はないが男子については何名か転入の記述がみられる。例えば六月一八日入学の

兼平静治（三年）については名簿の上に「鯉ヶ沢西海尋常小学校へ転入」と記した付箋が貼布されている。このように付箋が貼布されている場合もあるが、その他の者については名簿の上の欄外に転入校が記されている。例えば八月一七日入学の山戸萬（四年）の名簿の上には「朝陽小学校ヨリ」と、また同日入学の宮川喜三郎（四年）は「大成小学校ヨリ」とある。このように市内小学校からの転入も多いが、一〇月四日入学の長谷川建吉（三年）の場合は「舞戸小学校ヨリ転入」と、また同日付、村田忠三郎（四年）の場合は「青森尋常小学校へ転入」と、また一月一五日入学の丸瀬正明（三年）の場合は朱書で「鯉ヶ沢尋常小学校ヨリ転入」と記されており、津軽地方を中心に県内各地からの転入がみられた。

なおこの年（明治二二年）は特に簡易小学校からの編入が目立つ。九月九日付で福島佐一と木村政吉の二名が、そして九月一六日付で木村利作、翌九月一七日付で相馬金作の合計四名が相次いで、いずれも「智新簡易小学」より和徳尋常小学の四年に編入していることが確認される。簡易科ないし簡易小学とは、当時の文相森有礼が国民の就学普及をはかる目的で尋常小学、高等小学といういわば本体外に設けたもので授業料無償、学校経費は区町村費の負担、三年課程で授業時間も一日二時間以上三時間以内、カリキュラムも読書、習字、作文、算術の基本のみという、まさにかつての寺子屋のカリキュラムに近い簡易な学校であった。青森県においては明治一九年（一八八六）七月に「小学簡易科教則」が制定され簡易小学の設置が進められていくが、東北の中でも青森県は極めて簡易小学（簡易科）が多かったようである。明治二〇年（一八八七）の『文部省年報』に次の記述がみられる。

「青森県ハ一郡ニ一二箇ノ高等小学校ト尋常小学校ト併置シ戸長役場区域域内ニ尋常小学校、小学簡易科ヲ併置若クハ特置セリ要スルニ高等小学校ハ秋田、山形ノ二県ニ多クシテ岩手、青森ノ二県ニ少ナク小学簡易科ハ青森県ニ最モ多クシテ、岩手県之ニ亜キ秋田、山形ノ二県ニ少ナシトス」⁴²（傍点引用者）

また次は明治一九年（一八八六）の青森県東津軽郡の学事報道であるが、県民の経済状況や教育意識等から授業料無償の簡易科に通う生徒が極めて多い実状が

指摘されている。

「簡易科生徒ノ教此ノ如ク（郡内ノ小学校不残組織変更スレハ簡易科校十九生徒八百七十五人ヲ増ス）多キヲ占ムル所以ノモノハ実際貧困ニシテ授業料ヲ納ル能ハサルモノ素ヨリ多シト雖トモ蒙昧無知ニシテ未タ教育ノ真味ヲ嘗メサルノ父兄ニ於テハ授業料ヲ納メテ子弟ノ教育ヲ托スルハ寧ロ無用ノ浪費ナリト誤認シ唯学校ハ法規上止ムヲ得スシテ之ヲ置キ子弟ハ督責ヲ受クルニ依リ止ムヲ得スシテ上校セシムルナリ」⁴³

もともと簡易科の設置状況は全国規模でみると地域によってかなりの隔差があった。「大まかにいって、関東甲信越にあたる第一地方部および東北・北海道の第二地方部ではその設置が少なく、逆に中国・四国の第四地方部、近畿・東海・北陸の第三地方部、九州・沖縄の第五地方部等で設置が多かった。」⁴⁴と指摘されているように、西日本に多かったようであるが、比較的少ない東北の中で青森県は多い方であったことは先の『文部省年報』等に指摘されていたところである。

弘前の場合、市内（明治二二年市制施行）の五校（朝陽、和徳、時敏、城西、大成）はいずれも尋常小学校として簡易科を設けなかったが、弘前を中心とする中津軽郡の殆どどの小学校は二〇年から二一年にかけて簡易小学校となった。列記すると次の二〇校である。カッコ内の数字は簡易小学校となった年月である。⁴⁵

- ・十腰内（二〇・四 現修齊小学校の前身）
- ・大森（二〇・五 現卓雄小学校の前身）
- ・小友（二〇・五 現小友小学校）
- ・鬼沢（二〇・四 現自得小学校）
- ・楠木（二〇・四 一年にして鬼沢小学校と統合）
- ・三和（二一・四 現三和小学校）
- ・笹館（二一・四 一年にして三和小学校と統合）
- ・青女子（二〇・三 現新和小学校）
- ・種市（二〇・三 明治三九年に青女子小学校と統合）
- ・三省（二〇・七 この時崎小学校と統合）
- ・外崎（二〇・五 現豊田小学校）

- ・知新(二〇・五 現福村小学校)
- ・新里(二〇・五 昭和二年福村小学校と合併)
- ・隆親(二〇・五 現堀越小学校)
- ・磨光(二二・四 現千年小学校)
- ・清水森(二二・四 大正一二年千年小学校に統合)
- ・大和沢(二二・三 現大和沢小学校)
- ・小沢(二二・四 現小沢小学校)
- ・青柳(二〇・四 現青柳小学校)
- ・時習(二〇・五 簡易小学校設置と同時に国吉小学校の校名改称、現東目屋小学校)

なお中津軽郡のなかで強行(現高杉小学校)、富栄(現船沢小学校)、致遠(現致遠小学校)、進修(現城東小学校)、養正(昭和三年に時敏小学校に統合)の五校は簡易科を設置せず尋常小学校となった学校である。

明治二年(一八八九)九月に和徳小学校に四人の編入生をみた智(知)新簡易小学校も、右に列記したなかにあったように明治二〇年五月に簡易小学校になったものであるが、明治九年(一八七六)一〇月に中津軽郡福村に創立した学校である。距離的に近かったとはいえ、このように簡易科三年課程を終えた者が尋常小学四年に編入するケースが少なからずみられたことは、一方で不就学や中途退学が多い状況下にあつて注目すべきことと言わなければならないであろう。

明治三年(一八九〇)の入学者名簿にも八月五日入学の相馬丑太郎(四年)の住所欄に括弧して(簡易科卒業)と記されているから、同様の編入ケースと言えよう。同年は右の他二名の転入がある。すなわち八月一日付、工藤定吉(三年)の住所欄にはやはり括弧して(大成小学ヨリ転入)と、また二月四日付、神章三(四年)の住所欄にも同様に(大成ヨリ転校)と記されている。この年は大成小学校からの転入が目立っている。『和徳小学校日誌』の同年三月四日付に「大成尋常小学校焼失センタメ同校生徒五名本校ニ転校セリ」との記述がみられるが、名簿上大成小学校からの転入が確認されるのは右の二名のみである。しかも八月と一二月の転入であるから『日誌』に記載の五名とは別の者であろう。とすればこの年の大成小学校からの転入はかなりの数であつたと思われる。ただし

右の二名の転入が、大成小学焼失という不慮の事故が因となつてのものかどうかは定かではない。なお同年の女生徒については転入の記述はみられない。

明治四年(一九〇一)の入学者名簿においては二月一三日付、葛西直吉(一年)は「再入校」と、また近岡岩太郎(四年)は「再入学」と記されており、一度退学した者が再度入校したケースであろうか。なお四年の近岡の場合、同年の八月三十一日付のところに「卒業生補習ノ為再入学」と記されている。明治三年の「小学校令」において「補習科」について規定されるようになるが、和徳小学校においても、卒業後、補習のため再入学するというケースもあつたようである。

同年の他校からの転入例を挙げていくと八月二一日付、加藤友太郎(四年)の住所欄には「五所川原小学校」と朱書されている。なお加藤については「入學願」の資料もあり、その文面に「右者は迄五所川原尋常小学校ニ於テ第四年課程ヲ修業候處今度弘前へ轉住ニ付御校ニ入学為致候然上ハ御規則堅為相守可申候間此段奉願候也」とあることから、恐らく一家挙げての弘前への転住に伴つての転校であつた事情が察せられるのである。以下、八月二六日付、花田治三郎(三年)については「私立学校ニ転入」とあるが学校名は記されていない。一〇月一日付、山本忠蔵(四年)の住所欄には「全市(註：弘前市のこと)大字北丸町十六番戸浪岡陽之助方寄留 東津軽郡青森町大字米町七十一番戸平民 青湾学舎四年生」とある。青森町にある創立間もない私立学校青湾学舎からの編入であり、弘前市内北丸町に寄留して和徳小学校に通学したわけである。

同年の女子については六月一六日付転入が二人いる。そのひとり成田すあ(二年)は「再入校」であるが、もうひとり小野きよ(三年)は住所欄に「北海道」と朱書されており、北海道からの転入である。次に八月二一日付、大高ひで(三年)は「浦町小学校」と朱書されているように青森町の浦町小学校からの転入である。なお同日入学の工藤さつき(三年)については『入退校簿』の方には何ら転入等の記述はないが当人の次の如き「入校願」があり、市内の時敏小学校三年からの編入であることが判るのである。

入 校 願

弘前市大字代官丁廿八番戸
土族 岩根 妹

時敏尋常小学校
第三年生

工 藤 さつき
明治十四年五月二十日生

山 中 (朱書)

右者今般都合ニヨリ御校へ入
学為仕度候間御許可被成
下度此段奉願候也

明治二十四年八月二十一日

右願主

工 藤 岩 根

和徳尋常小学校長

三上徳之助殿

願之趣聞届ク

明治廿四年八月廿一日

和徳尋常小学校長 三上徳之助

(朱書)

明治二五年(一八九二)の入学者名簿では、男子では正田寛(四年)が七月一
四日付「金木小学校ヨリ轉校」とあり、九月二日付で黒滝善造(四年)と黒滝秀
三郎(三年)の二名(恐らく兄弟であろう)が、いずれも「時敏小学校ヨリ轉校」
と記されている。一方女子については今やさ(二年)が七月二六日に「北海道刈
別小学」より転入の記録一件のみである。

明治二六年(一八九三)の名簿になると転入校が住所欄にでなく学年欄に記入
されているが、先ず男子入学者名簿の最初の二名は次の如くいずれも転入である。

番号	姓名	学年	備考
廿六年 一月十四日	中津輕郡西日屋村大字白沢 廿番戸平民農嘉平二男	四年生	
	当市徒町川端町七番戸大沢	中郡大	
	慶藏方寄留	秋尋常	
		小学	
	西川東吉郎	十四年	
		五月生	

式号

全

中津輕郡岩木村大字宮地六
十一番戸平民農仁兵衛長男
当市代官町石橋藤之進方寄
留

四年生
中郡諏
訪小学
ヨリ轉

三上 修助

十四年
二月生

右の二名につい

てはいずれも「入

校願」等があり、

他に類例をみない

長文の「願」文か

ら、転入につい

てのかなり詳細な

事情を窺い知るこ

とが出来る。すな

わち下は西川東吉

郎の「入學願」で

あるが、これによ

ると西川は、すで

に明治二五年(一

八九二)四月に大

秋尋常小学校の第

三年級を卒業して

いたのであり、一

年近く経った二

六年一月に和徳

小学校四年級への編入を願ひ出

ているわけである。

冒頭「右者私義御校へ入學致シ度志願ニ候間」とあるよう

に編入は本人の「志願」によるものであり、「若し御許可之節ハ御規則厳重ニ可

相守私一身上ニ係はる事ハ保証人引受へく此段保証人連署之上奉願候」と父親の

嘉平が保証人として連署で願ひ出ているのである。そして先程の名簿から、一月

一四日付で編入が許可され、本人は弘前市徒町川端町七番戸の大沢慶藏方に「寄

和徳尋常小学校
三上徳之助殿
明治廿六年一月
保証人連署上奉願
西川東吉郎
中津輕郡西日屋村大字白沢
廿番戸平民農仁兵衛長男
当市代官町石橋藤之進方寄
留
四年生
中郡諏
訪小学
ヨリ轉
三上 修助
十四年
二月生

留」して通学するようになったと察せられるのである。なお大秋尋常小学校は明治七年（一八七五）に中津軽郡大秋村に設立された私立小学校で、三年制の尋常小学校であったと思われる。当時、義務教育は四年を主体としていたが、土地の状況によっては三年も許可されていて、尋常科三年を終えただけでも就学義務を充たしたものとみなされていた。したがって一応就学義務を果たした者が、さらに四年制尋常小学校の四年級への編入を「志願」し、弘前市内に「寄留」し通学するということは、不就学や中途退学が広範化していた当時において極めて奇特な、向学心に燃えた注目すべき行為と言わなければならないであろう。先程の簡易科（なお「簡易科」は明治二三年の「小学校令」によって廃止された。）からの四年編入に類する事例とみることが出来るよう。

入校御届

和徳小学校
明治二七年三月一日
入校御届
上
和徳小学校
明治二七年三月一日
入校御届
上
和徳小学校
明治二七年三月一日
入校御届
上

編入、その途中より「都合有之」（ために）和徳小学校四年級への編入という経過を把むことが出来る。なおこの「届」をしたためた石橋藤之進は、先程の『入退校簿』から三上修助の寄留先で弘前市代官町に居住する者であることも確認される。

二六年（一八九三）の名簿では他に二月六日付、金谷勇蔵（二年）が「五所川原小学へ転入」、四月一日付、山辺哲而（三年）も「五所川原小学へ転入」と五所川原からの転入が目立つ。その他二月二日付、津山秀雄（一年）は「朝陽小学校ヨリ轉」と記されているが、「入校願」等を綴じた『明治廿六年中 入校件』の簿冊のなかに、津山が朝陽小学校（校長森健枝）に提出し承諾を得た「転校願」があった。その文面に「今般都合ニ寄リ弘前市大字茶畑町ニ轉住致シ候ニ付和徳尋常小学校ニ入校為致度」とあり、転住に伴っての転校であった。同年には女生徒も一人、朝陽小学からの転入があった。

明治二七年（一八九四）の名簿では、三月一日入学の佐藤久吉（三年）の住所欄に「是迄ハ南津軽郡大鰐尋常小学校ニ於テ修業」と朱書されている一件のみである。最後に二八年の名簿は全体に空白が多く、入学者名簿にも転入等の記述はひとつもみられなかった。

以上、資料で把握しうる限りであるが、他校からの和徳小学校への転入状況について考察した。転入先については青森町や北海道あたりからの転入も若干みられたが、特に多いのは市内の大成、朝陽、時敏小学校などからの転入であり、そして津軽地域内では五所川原や鯉ヶ沢方面からの転入が比較的目的立っていたと言える。それら転入は勿論一家挙げての転居に伴ってのケースが多かったであろうが、特に郡部からの転入の場合は、地元の簡易小学校や三年制尋常小学校を修了（卒業）したのち弘前市内に「寄留」し和徳小学校の四年級に編入するというケースが少なからず見受けられた。こうしたケースは、先にも指摘したが、一方で不就学や中途退学が広範化していた当時の状況下にあつて極めて注目すべきことと言わなければならないであろう。

次に転出の事例、実態について考察してみることとする。

表5 和徳小学生徒の転居先内訳

転居先 内訳 年 度	弘 前 市 内	津軽地域（弘前市内を除く）					青 森 県 内 （ 津 軽 地 域 ） を除く	県 外	不 明 （無記入）	合 計
		中 津 軽 郡	東 津 軽 郡	西 津 軽 郡	南 津 軽 郡	北 津 軽 郡				
明治21年	0	1	2	2	2	1	0	2	3	13
〃 22年	2	0	4	3	3	0	0	4	3	19
〃 23年	6	2	6	6	0	1	0	3	2	26
〃 24年	7	0	5	0	0	0	1	1	1	15
〃 25年	8	0	2	2	5	0	0	0	3	20
〃 26年	6	2	4	1	1	0	1	2	2	19
〃 27年	6	2	0	0	0	0	0	0	8	16
〃 28年	5	2	8	1	2	0	2	4	6	30
合 計	40	9	31	15	13	2	4	16	28	158
百分率(%)	25.3	44.3					2.5	10.1	17.7	100.0

(和徳小学校『入退校簿』より作成)

二、転出（転校・転居）の実態

(一) 転居先の地域別内訳

転入については資料のうえからは必ずしもその全容を把握し得たわけではないが、一方転出による退学の場合は、大抵『入退校簿』の退学者名簿の「住所父母姓名族籍」の欄に転居ないし転校先が記入されており、ほとんどの全容を把握することができると各年度の生徒の転居先の地域別内訳を一覧表にする

この表をみて指摘できることは、まず弘前市内での転居がかなり多いということ、次に市外への転居の場合も大部分が津軽地域内であって市内と津軽地域で転居者全体の約七割（不明もあるからさらに上回る）を占めていることである。そして県内といっても津軽地域を除いた南部地方への転居はごく僅かである。以下、各地域毎の詳細な内訳についてみてゆくことにしたい。

① 弘前市内での転居

まず市内での転居が多いが、市内の場合は大抵、町名もしくは転校学校名が記されている。学校名が記されている一三名の内訳を記すと大成小学校：六名、朝陽小学校：三名、時敏小学校：三名、城西小学校：一名、である。なお町名で記されている場合、学区毎にその内訳を記すと以下になる。

・第一学区（朝陽小学校）

在府町：三 本町：二 新寺町：二 西茂森町：一 塩分町：一 大工町：一

一（計一〇名）

・第二学区（大成小学校）

土手町：四 品川町：三 銅屋町：二 住吉町：一 富田新町：一（計一一

名）

・第三学区（和徳小学校）

和徳町：一（計一名）

・第四学区（時敏小学校）

東長町：一（計一名）

・第五学区（城西小学校）

鷹匠町：一 五十石町：一 平岡町：一 新町：一（計四名）

なお和徳小学校は第三学区となっており、学区内の代官町から和徳町へ転居した者が一人いるが、この場合は転居を機に退学したあと他の学校に転校することにはなかったであろう。このように転居によって転校する場合と学校を止めてしまう場合とがあったと考えられるが、一応他学区への転居をその所属学区の小中学校への転校と仮定し、先の学校名で記された者と併せ転居先の学区（学校）別内訳

を記すと第一学区(朝陽)：一三名、第二学区(大成)：一七名、第四学区(時敏)：四名、第五学区(城西)：五名、となり市内では特に大成小学校と朝陽小学校への転校が多かったことが察せられる。

左の資料は明治二六年(一八九三)に和徳小学校から朝陽小学校へ転校した伊藤祐明の「轉校願」である。市内の「新寺町六拾番戸へ轉宅」したわけであるが、文中「未タ年若ニ而日々通學致兼候間朝陽小學校へ轉校御聞届被成下度」と書かれている部分が注目される。同年一〇月に中津輕郡門外村に転居した福士翠(四年)の「轉校届」にも「通學致兼」ゆえ地元の小學校への転校を願ひ出ている文面があり、通學の便という点から学区外への転居は概ね所属学区の小學校への転校となるのが普通であった(特に年少生徒の場合)と思われる。

轉校願

青森縣立和徳小学校
校長 伊藤祐明
明治二六年一月一日

和徳尋常小學校長上

伊藤祐明

右尋常小學校に於て通學致兼有候間、
所屬学区外に轉校せしむる事、
通學致兼候間朝陽小學校へ轉校御聞
届被成下度此願ひ申上

伊藤祐明

明治二六年

伊藤祐明

伊藤祐明

和徳尋常小學校長

三上徳之助殿

普通であった(特に年少生徒の場合)と思われる。しかし制度的には必ずしも学区は厳守されなければならないというものでもなかったようである。すなわち明治九年(一八八六)二月一八日、青森県令福嶋九成より就学についての「諭達」が出されているが、そこには「県下ノ状況タ

ル土地広漠戸口稀疎殊ニ三冬積雪ノ障碍少ナカラサルヲ以テ普ク児童ノ通學ノ便ヲ得セシメントスルハ実ニ至難ノ事」ゆえに「児童ノ父母後見人タルモノハ学校ノ公立私立タルニ拘ハラズ学区ハ自他タルヲ問ハス可成其便ニ依リ就学セシムルヲ勉メ」(傍点引用者)とあるのである。要するに通學の便という事情が優先されていたわけである。

なお通學の便ということで、殊に日本海に近い西津輕郡などは冬の積雪がひどく通學も阻まれたようである。季節による生徒の就学状況に関して明治一九年(一八八六)の青森県の学事報道中、西津輕郡に関する次の叙述がある。

「生徒修學ノ状況ニ至リテハ春二月中旬頃ヨリ漸々増加ヲ来シ七八月ニ至リ最も多ク秋十月下旬頃ヨリ又漸々減少ヲ来シ十二月頃ニ至レハ大凡六分ノ一ヲ減スルヲ常トス是必竟風雪ノ為メ六七歳ノ小兒ニ至リテハ通學スル不能ニヨル」寒冷地においては積雪や降雪などの気候的要因が生徒の就学や通學をも阻害するものであったことが察せられるのである。

② 津輕地域内での転居

市内での転居とともに多いのが東、西、南、北、中津輕郡すなわち津輕地域内での転居で全転居者の四割以上、これと市内と合わせると実に七割以上を占めることになる。津輕地域内での転居の場合も転校学校名が記されている場合もあり、その内訳は青森小学校：三名、黒石小学校：一名、進修小学校：二名、の計六名でそれ以外は郡町村名等で記されている。各郡における町村毎の内訳を示すと次のようになる。なお郡は転居者数の多い順に並べている。

・東津輕郡

青森町：二五 石江村：一 今別村：一 滝内村：一 (計二八名)

・西津輕郡

鰺ヶ沢町：八 五所川原村：五 岩崎村：一 沼崎村：一 (計一五名)

・南津輕郡

黒石町：四 大釈迦村：三 蔵館村：一 石川村：一 藤崎村：一 大鰐村：一 川辺村：一 (計一二名)

・中津軽郡

富田村：三 和徳村：二 門外村：一 紙漉沢村：一（計七名）

・北津軽郡

薄市村：一 野里村：一（計二名）

これに先の学校名で記された者の数を加えると各郡毎の内訳は東津軽郡三一名、西津軽郡一五名、南津軽郡一三名、中津軽郡九名、北津軽郡二名となる。転居先で目立つことは東津軽郡青森町への二八名（青森小学校三名を含む）を断然筆頭に鯉ヶ沢町の八名、黒石町への五名（黒石小学校一名を含む）、五所川原村への五名など各郡の中心的町村への転居が極めて多いということである。弘前は明治二二年（一八八九）に県内で最初に市制が敷かれ、なお同時に青森、黒石、鯉ヶ沢、三沢に町制が敷かれたのであるが、和徳小学校生徒の移動状況を見ると弘前市への転入も少なくはないが、むしろ市外への転出の方が上回っている印象を受ける。確かに市制が敷かれたとはいえ、市制施行後の弘前の人口は減少傾向にあったようである。『弘前市教育史 上巻』に次の叙述がある。

「市制施行当時の弘前は、旧城下町のそのままの引続きといつてよく、面積は五・四九平方キロ、八十八の町から成った。弘前は藩政時代においては人口は三万を下ることなく明治初年には四万近い人口をかかえていた。維新後は士族階級の没落と離散が間断なくつづいていた。すでに早くに県庁は青森に移転して県政の中心は青森に固定していた。特記するにたる産業もおおらず、旧藩時代以来の、周辺の農村地帯の消費経済によりたのむ小規模産業や教育・文化等の地方的中心という旧城下町の性格がそのまま継続していた」

すなわち同書によると弘前が県下に先駆けて市制を施行し得たのは主として城下町、藩政の中心であったという歴史的遺産に拠るものであり、したがって市制施行が直ちに次の発展につながるものでなく、「市制施行後も人口の減少はなお続き、やっと漸増をみるのは、弘前に第八師団がおかれた明治三十年以後のこと」と指摘されているのである。なお青森―弘前間に鉄道が開通するのも明治二七年（一八九四）のことで、以後産業も次第に活発化するようになる。明治二

〇年代における弘前市の人口の減少傾向というものは和徳小学校生徒の転居（転入・転出）状況にもある程度窺えることであつたと言えよう。

③ 南部地方（県内）、北海道等への転居

表5にみた如く転居者の大部分（七割）は市内ないし津軽地域内という比較的近距離範囲であつた。県内といつても津軽地域を除きたいわゆる南部地方への転居は僅か四名と少ないのが注目される。『入退校簿』の記述にしたがうと「下北郡」「上北郡野辺地村」「三戸町」「南部地方」となっている。

最後に県外への転居であるが、一六名の県外転居者中一二名が北海道と庄倒的に多い。その殆んどは単に「北海道廳」と記されているだけであるが、詳しい地名が記されている者の内訳をみると函館三名、釧路一名、札幌一名、後志国一名となる。北海道を除いた四名の転居先は東京、盛岡、仙台、石川県（金沢）が各一名である。

ところで県外の場合圧倒的に北海道が多いのは何故であろうか。北海道への転居者一二名中二名は「帰村」「寄留」と記されている。すなわち北海道出身の児童で恐らく単身で弘前に寄留し通学していた者が途中で退学し「帰村」する、あるいは逆に北海道の方に単身「寄留」というケースであろう。しかし残りの一〇名については「移轉」ないし「轉居」と記されており、恐らく一家挙げての転居であつたと思われる。その一〇名の年度別内訳は明治二一年が一名、二二年三名、二三年一名、二四年一名、二六年二名、二八年二名と二二年が一番多く各年平均しているが、明治二二年（一八八九）に北海道、青森、秋田、山形の各道を視察した文部省視学官相良長綱による巡視報告書のなかに「北海道ノ人口ノ増加セシハ実ニ近年ニアリ是皆内地ヨリ移住セシモノニシテ其沿海ニアルモノハ漁業ヲ業トシ内部ニアルモノハ開墾ヲ事トス」（傍点引用者）とある。すなわち明治二〇年代に内地より北海道への開拓移民が極めて多かったことが指摘されているのである。北海道に最も近い青森県弘前の、和徳小学校生徒の家族挙げての北海道への転居も、恐らくその開拓移民のケースが決して少なくはなかったと推察されるのである。

以上、転居先の地域別内訳を明らかにし、特に北海道への転居の事情について言及したが、次に転居の主たる理由について考察することにする。

(二) 転居理由についての考察——『明治二六年中 退校件』を主資料として——

『入退校簿』の退学者名簿には、転居の場合は大抵その転居先、転校先が記されているのは既述したとおりであるが、その転居の理由や事情については特に記されていない。ところでこの点について、和徳小学校資料中に『明治二六年中 退校件』と標記した簿冊がある。これは明治二五、六両年度分の「退校願」等（註、後述する如く標記は様々であるので、以下便宜上「退校願」等と称することにする）四三通が綴られた資料で、そのなかには二八年のもの一通、二九年のもの五通も混じっている。この「退校願」等の文面によって、転居の理由や事情をある程度察することが出来る場合がある。したがってこれを主資料として転居の理由、事情について考察することにするが、第一に挙げられる理由は家事都合というところである。

退校願

南洋駐留事務所 村（商店） 四年生 大川ちよ
右者今般家事都合依退校
為致度候御許容被成下
度此方奉願矣
明治二五年七月五日

父大川清一

和徳尋常小監校長上徳之助殿
願之趣聞函

明治二五年七月五日

① 家事都合による転居
上に掲げた資料は、明治二五年（一八九二）七月五日付、四年生、

大川ちよの「退校願」である。文中「家事都合ニ依リ」と明記されており、かつ右肩に「南洋駐留藤崎村へ転居」と朱書されている。同女の『入退校簿』の方にはただ「藤崎村へ轉住」と記されているだけであるが、それが右の例のように「退校願」の文面から家事都合による転居という事情が知れるのである。明治二五、二六、二八年分については「退校願」等と『入退校簿』とを照合することが出来るが、同一人について両者を照合すると一般に「退校願」等の方に転居の理由や事情を示す字句が記されている場合が多く、大抵は「都合」ないし「家事都合」という字句がみえる。三七件（三八名）について両者を照合し得たが、次表（表6）はその照合を一覧表にしたものである。退学理由、事情に関して、上段が「退校願」等の、下段が『入退校簿』の記述である。

表6 「退校願」等と『入退校簿』の照合

通し番号	日付	生徒氏名	願（標記）	退学理由の記述	『入退校簿』の記述
1	25・1・18	塩谷 与市	退校願	商業見習	商業見習
2	25・3・8	伊藤 正	退校願*	黒石町へ転住	黒石へ転住
3	25・4・1	大高 ひで	退校願	（理由の記述なし）	裁縫見習
4	25・4	宮崎 末吉	退校願	都合	品川町へ転居
5	25・4・18	築館 真	退校願	都合	西津軽郡岩崎へ転居
6	25・4・20	富士 とめ	退校願	家内都合	裁縫見習
7	25・4・28	大森 敬一	退学届	都合	東津軽郡青森へ転居
8	25・5・28	古川初太郎	欠席御届	病氣「退校ノ旨申出」と朱書	病氣
9	25・6・2	山谷 たか	退校願	青森小学校へ転校	青森小学へ転校
10	25・6・2	赤平 キヨ	退校願	裁縫修業	裁縫見習
11	25・6・2	八木沢キサ	退校願	都合により時敏小学へ転校	時敏小学へ転校
12	25・7・5	大川 ちよ	退校願	家事都合「南洋駐留藤崎村へ転居」と朱書	藤崎村へ転住

36	26・11・16	伊藤 克逸	退校願	西津軽郡鰺ヶ沢町	西津軽郡鰺ヶ沢町
35	26・10・16	福士 翠	転校届	都合により中津軽郡門外村へ転籍	中津軽郡門外村へ転居
34	26・10・4	工藤 みね	退校願	転籍	東津軽郡滝内村へ転居
33	(無記)	藤林 しげ	退校願	森町へ転居	青森町へ転居
32	26・5・27	伊藤 祐明	転校願	家事都合により青森町へ転居	新寺町へ転宅
31	26・5・13	川島源兵衛	転校届	新寺町へ転宅により朝陽小へ転校	朝陽尋常小学校へ転校
30	26・5・8	後藤 兵一	転校御届	都合により朝陽尋常小学校へ転校	朝陽尋常小学校へ転校
29	26・3・29	佐藤 きさ	退校届	養女	養女
28	26・3・15	今 貞行	死亡届	死亡(肺病)	病死
27	26・2・2	須藤 とく	退校願	三戸郡地方へ転居	三戸町へ転居
26	26・1・30	角田 はつ	死亡御届	亡	病死
25	26・1・20	五十嵐勝弥	退校届	一月十一日午後十一時、病死	病死
24	26・1・16	木村 茂作	退校願	職事都合	(無記入)***
23	25・12・23	成田 しな	退校願	針仕事	**
22	25・12・16	二川原忠吉	死亡御届	病死	病死
21	25・11・11	菊池 たまきせ	退校願	都合、氏名の上に「大成小学校へ転校」と記入	銅屋町へ転居
20	25・11・4	三浦 とめ	退校願	都合、氏名の上に「大成小学校へ転校」と記入	銅屋町へ転居
19	25・11・4	三浦 まゆ	退校願	家事都合により南津軽郡大釈迦村へ転宅	南津軽郡大釈迦村へ転居
18	25・11・4	三浦 清磨	退校願	家事都合により南津軽郡大釈迦村へ転宅	南津軽郡大釈迦村へ転居
17	25・8・30	木村友太郎	退校願	都合	和徳町へ転宅
16	25・7	川村多三郎	退校御届	家事都合	転校
15	25・7・23	宮田 ふち	死亡御届	病死	病死
14	25・7・6	田澤 和一	退校願	工業伝習	工業見習
13	25・7・6	佐藤 幸正	退校願	都合「在府町へ転居」と朱書	在府町へ転宅

37	28・5・13	加賀谷千代	退校願	青森町へ養子、青森小学校へ入学	へ転居
				(無記入)	

* 伊藤正の「退校願」は同じ書類が二通あり、そのうち一通のみ「聞届」と朱書されている。

** 成田しなについては『入退校簿』の方に同名を見出せない。同年中の退学者名簿に「成田きへ」(四月二〇日付退学)、「成田ゆき」(四月二〇日付退学)の名前がみえるが、退学日付も住所も異なるし別人であろう。

*** 木村茂作については『入退校簿』の方では二六年の名簿にはなく二七年の名簿にあり三月三十一日付退学となっているが、退学理由については何も記されていない。

さて右の表に掲げた三七件(21番の「菊池たま、きせ」は連記されているので人数でいうと三八人となる)の『入退校簿』の記述にもとづいて、転居を理由に退学したものは二二件ある(表の上の欄外に〇印をつけたもの)。これはすなわち『入退校簿』の方に〇〇へ転居(転宅、転住、転校)と記された件数であるが、「退校願」等の方にはさらにその転居の理由について「都合」ないし「家事都合」といった字句が添えられていたり、「転籍」といった事情が書かれていたりしている。すなわちその内訳は、「家事都合」と記されたものが六件(うち三件は兄妹であるから世帯数では四)、「都合」という字句がみられるのが九件、「転籍」と書かれているものが二件(うち一件は「都合」と「転籍」と両方の字句がみられる)である。要するに転居等の背景には概ね家事都合があったのであり、したがって「家事都合」による退学と見做してもよいわけであるが、それが転居を伴った場合には『入退校簿』に「転居」等と記されたことになるであろう。

ところで「家事都合」といっても、今日「退学願」等に常套的に用いられる「一身上の都合」との表現と同様、中味が必ずしも明確でない憾みがあるが、主として家庭の経済事情に関わるものであったと察することが出来る。例えば明治二三年(一八九〇)退学の男子生徒六名のうち五名について、退学理由について当初「授業料不納ニ付校差止ラル」と書かれたあとがあり、それを朱線で消し

て傍に朱で「家事都合」と訂正された箇所がある。すなわち授業料を納め得ず除名処分さるべき生徒が「家事都合」による退学として処理されている事例をみる事が出来るのである。また明治一九年（一八八六）の南津軽郡の学事報道に「本年市街小学校ノ変更ニヨリ授業料ヲ納メ得サルモノノ退学スルモノ頗ル多シ」とある。森文相は自らの教育観に基づいて授業料制を方針として採ったのであるが、本県人にとって授業料負担はかなり過重なものであり、それが前述したように授業料無償の簡易科生が多かった理由であるとともに、授業料等の負担が不就学ないし中途退学の主たる原因のひとつになっていたと察せられる。家庭の経済を建て直すため新しい職業や生活の活路、基盤を求めて新しい土地に転居するという場合が極めて多かったものと思われる。かつ経済的事情に起因する、生活の活路を求めての転居の場合には概ね一家挙げての転居というケースが多かったと推察される。下に掲げた資料は明治二六年（一八九三）十一月一六日付、伊藤克逸の「退校願」であるが「…今般西津軽郡鰺ヶ沢町へ全戸、轉住致候間…」（傍

退校願

伊藤克逸

和徳小学校ノ退校願
伊藤克逸
今般西津軽郡鰺ヶ沢町へ全戸、轉住致候間…

和徳小学校ノ退校願
伊藤克逸
今般西津軽郡鰺ヶ沢町へ全戸、轉住致候間…

点引用者）と一家挙げての転居であることが明記されている。一家挙げての転居に伴い、和徳小学校に通学していた子供（たち）も当然退校を余儀なくされるという場合が極めて多かったものと思われるのである。

「家事都合」が、主として家庭の経済事情に関わるものであったとすれば、ひとつは今みたように生活の活路を求めての転居というケースもあれば、或いは子供を退学させて家事に従事させたり職業見習に出したりするケースも少なくはなかったようである。例えば明治二三年（一八八九）九月一二日付退学の小林元次郎（三年）の名簿には退学理由を「家事都合」と記し、その下に括弧して（職業見習）とも書き添えている。また左の資料は明治二六年（一八九三）に提出の木村茂作の「退校願」であるが、「右者家事之都合ニ付キ退校致シ候間御許可被成下度…」と家事都合に由る退学を願

退校願

和徳小学校ノ退校願
木村茂作
右者家事之都合ニ付キ退校致シ候間御許可被成下度…

和徳小学校ノ退校願
木村茂作
右者家事之都合ニ付キ退校致シ候間御許可被成下度…

い出ているが、またその右に「職業見習」と付記されている。なお見習による退学については稿を改めて考察する予定であるが、かくみてくると「転居」といい「家事都合」といい「見習」といい、一応『入退校簿』の標記にしたがって理由項目として分けて数の内訳を

出したのであるが、いずれも主として家庭の経済事情に起因しての、かつ相互に関連をもつ事柄であったとみることが出来る。

② 帰郷、寄留、転籍等による児童の単身移動

転居の大部分は既述したように新しい生活の基盤を求めての、一家挙げての転居であったと思われるが、なかには児童だけの単身移動と思われるケースも少なくなかった。ひとつは帰郷、帰村というケースである。すなわち子供だけが弘前市内の親戚宅等に単身寄留し通学していたものが、恐らく病氣とかホームシックとか家庭の事情とか何らかの事情で在学途中にして退学帰郷してしまうというケースである。

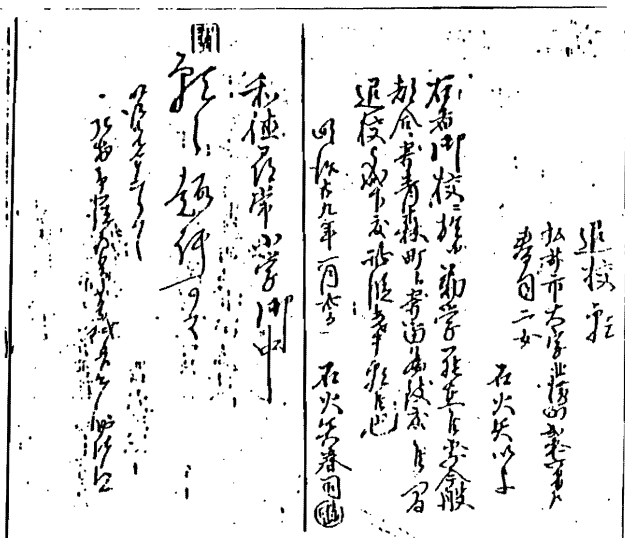
一例をあげると明治三二年（一八八九）四月二日の入学生に「久世賢一」という名前がみえる。住所欄に「瓦ヶ町廿二番戸寄留 金沢縣士族義一長男」とあるように金沢県出身で弘前市瓦ヶ町に「寄留」し和徳小学校に入学したわけであるが、年令欄に「四年四月」とあり僅か四才の、勿論学齡以下での入学である。ところでその同じ名前を同年（三二年）の退学者名簿にも見出すことが出来る。すなわち九月一二日付退学で、理由は「帰郷」とのみ記されている。僅か半年にも満たない短い在学期間が目される。四才というあまりにも幼少の身にして見知らぬ土地での生活に、あるいはホームシックにでも罹ったのであろうか、事情は審かではないがいづれにしても「帰郷」による退学の最年少の事例である。

他に退学理由として「帰郷」ないし「帰村」と記された例は二・三ある。明治三二年（一八八九）一月二〇日退学の山岸常吉（三年）は「釧路へ帰宅」、二五年（一八九二）八月退学の長谷川茂助（四年）および二七年（一八九四）九月一日退学の増川秀則（四年）の住所欄にはいずれも「帰村」とのみ記されており、帰郷先は判らない。

また帰郷や帰村とは逆に弘前市内から他所へ「寄留」とする場合もあった。下の資料は明治二九年（一八九六）一月三日付、石火矢いよの「退校願」であるが、「…今般都合ニ寄青森町ニ寄留為致度候間…」と寄留による退学の旨が記されているのである。「入退校簿」にも「寄留」と記されている者が数名確認され

るが、特に東津軽郡青森町への寄留が目立つようである。列記すると明治三四年（一八九九）九月五日退学の加藤友太郎（四年）、佐々木捨藏（一年）、二八年（一八九五）七月三十一日退学の齊木喜美藏（二年）、同年九月六日退学の平野つる（四年）はいずれも青森町への寄留であり、二六年（一八九三）一月三十一日退学の清水しか（一年）のみは市内住吉町への寄留となっている。

また児童の単身移動のなかには「転籍」（養子）というケースもあった。表6にあるように『入退校簿』の方には「転居」と記されているが「退校願」等の方に「転籍」と明記されている場合が二名（34、35番）あった。なお37番の加賀谷千代（三年）の場合、明治二八年（一八九五）五月一日付の退校で『入退校簿』の方には退校理由について何の記載もないが、（同年の退学者名簿は退学理由について「転居」と「死亡」以外は一切記載がなく空白欄が多い）同女の次の如き「退校願」があり「…今般青森町大字新安方町加賀谷仁三郎方へ養子ニ差遣候為青森小学校へ入学致度候間…」と退学理由が記されている。青森県の場合、特に「寄留」「転籍」による児童の移動が多かったことは明治一五年の「青森県年報」



にも指摘されていることであるが

(註5)参照、明治期においては多少の相違はあれ

た状況はかなり全国的なものであ

ったと思われる。例えば長野県小

明治二九年(一八九六)一月に単身

寄宿児童の就学取扱に關する「通

牒」が出されているが、その一例

らも当時の状況の一端が窺われる

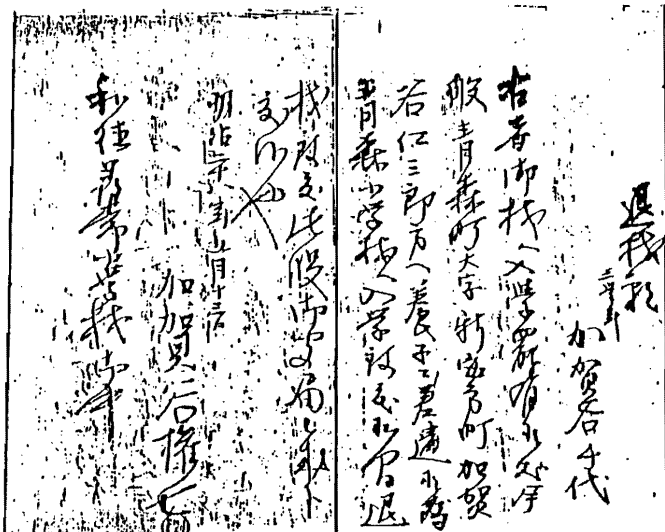
とに、「学齡児童ヲ就学セシムル資力ナクシテ子守奉公又ハ職工見習等ノ為中村ヨリ乙村ニ児童ヲ単身寄留セシムル場合」といった「通牒」の文面から、単身寄留が概ね奉公や見習のためであった事情も併せ窺えるのである。

以上、本稿は明治二〇年代における和徳小学校生徒の様々な理由による退学のなかで、一番多いケースであった「転居」による退学に焦点を置いて、その実態や背景、事情等を考察した。この考察を通して明治期の小学校生徒の中途退学は、今日高等学校や大学等に広くみられる、主として「一身上」の事由による退学などと異な

って、主として家庭の経済事情に起因するものであり、それが転居、授業料不納、家事従事、職業見習、転籍(養子)等々といった事態を招来

し、退学につながっていったと判断されるのである。すなわち明治期における小

学生の中途退学という広範な事態の背後には、その子どもを取り巻く家庭の様々



な事情が影を落としていたと言いうことが出来るのではなからうか。なお職業等の「見習」による退学、「疾病」「死亡」等の実態については稿を改めて思う。

註

- (1) 拙稿「明治期小学生の中途退学に関する考察・Ⅰ」和徳小学校『入退校簿』の分析(その1)——『弘前学院大学一般教育学会誌 第五号』昭和六〇年三月刊。
- (2) 「学制」頒布直後の明治六年(一八七三)には県内二四の小学校が設立(うち三校はのち「岩手県」に編入)されているが、弘前では朝陽小学(当時「一番小学」と称した)と和徳小学(「二番小学」と同一地区に二校の開校をみており、県内では他に例をみない。県内最大の市街で土族や大商人が多く居住した弘前は、公立小学校設立の条件が最も整っていたと言えよう。(『弘前市教育史 上巻』一七五頁参照)なお和徳小学校の開校は明治七年一月八日であるが、すでに六年二月より学校業務は開始されていた。(同書一八四頁)
- (3) 「入退校簿」の名簿様式は入学・退学いずれも、「通し番号」「許可年月日」「住所父母姓名」「年級」「生徒姓名」「年齢」という項目欄に沿って記入されている。明治二〇年(一八八七)二月に校則が制定されているがその第一章で「入退校」に關し「児童入学ノ時ハ父母或ハ後見人等ヨリ其児童ノ族籍姓名年令等ヲ記載シタル書面ヲ以テ出願スベシ」(第二条)、「生徒若シハ退学若クハ休校ストキハ父母或ハ後見人等ヨリ其旨具シ届出ツベシ」(第七条)などと規定されており、この入退校の書類に基づいて「入退校簿」が作成されるようになったものと推察される。(校則の全文は『青森県教育史 第一巻』七九四頁に掲載)
- (4) 『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』大日本教育会 明治二五年刊 四六頁。
- (5) 『青森県年報』『文部省第十年報 第一冊』四七七頁。
- (6) 『弘前市教育史 上巻』一九一頁。
- (7) 『青森県教育史 第一巻』四三九〜四二頁。
- (8) 青森県では明治九年(一八七六)十一月一日に、各小学区に居住する中産階級以上で名望があり學事に志の篤い者の中から「官庁ニ対シテハ學区ノ總代トナリ人民ニ對シテハ學区ノ一部トナリ官史ノ中間ニ處シテ専ラ各地學校ノ興盛ヲ計」りうる人物を選抜し學校掛にする「學校掛規則」を制定した。學校掛は各小学区に一名から五、六名おかれたが、従来、學区取締の重要な職分であった學校保護、學校經費、就學督促に關する権限の殆んどが學校掛に移譲されるようになった。すなわち學校掛とは、學区取締の職分遂行を、小学区の内から實質的に補佐し、区内の學事を實際的に遂行する機関として設置されたものであった。(『青森県教育史 第一巻』四九八〜五〇四頁参照)
- (9) 地域の実情に応じた校則の自由化という方針のもと青森県では明治二二年(一八八九)三月に従来の下等小学(四年)・上等小学(四年)にわたる正則としての小学教則や村落小学教則を改正し「是迄下等八級之者八十級ニ以上毎級石ニ準シ可繰入」とする十

級五年制の尋常小学教則を制定し一二年九月より実施した。この十級五年制は一五年（一八八二）七月一日には全国的な教則画一化の動向のなかで廃止されることになるが、恐らく本県独自のものであり、制定当時はどの程度の範囲にわたって十級五年制が採用されたかは明らかにできない。（『青森県教育史 第一巻』六〇三頁）し「尋常科五年十級制度の実施は、あまりに短期間だったため、和徳小学校を除いてほとんどの小学校の沿革史にも記載されておらず」（『弘前市教育史 上巻』三二六頁）ないようであるが、この「入学願」資料から亀甲小学でも十級五年制を採用していたものと推察される。

『弘前市教育史 上巻』三九七～四〇八頁。

『青森県教育史 第三巻』四七〇～一頁。

『文部省第十五年度』「地方視学」八二頁。

『日本近代教育百年史 4 学校教育 2 国立教育研究所編 一〇四頁。

『弘前市教育史 上巻』五三五～六頁。

同右書 二五二頁。

同右書 六二三頁。

青湾学舎は明治二〇年（一八八七）四月五日に青森市大字松森町に開設された私立学校で、創立者は津津醇。津津は会津藩士で明治六年下北郡田名部小学校の教員を皮切りに県の学務掛も拝名、学務に従事すること約一〇年。この間県内小学校をくまなく巡回、指導した。明治一六年二月には第三代青森県師範学校校長兼専門学校校長となるが在職一年一〇ヶ月にして辞任。明治二四年四月に私立青湾学舎を開校、専ら教育に尽力することになる。青湾学舎は小学部と青年部に分けられ、小学部は「小学校令」に則り尋常、高等とも公立小学校と同様の教育をした。青年部は夜間に教授し漢文、英文、数学を教えた。ここに学ぶ者は貧困家庭の児童や勤労青年が多く、授業料も滞納が多く津津はしばしば私財を投じて学校の経営に当たったという。こうして経営困難な私立学校を継続すること一二年、明治三二年（一八九九）八月に閉鎖した。（『青森県教育史 第一巻』九七九～八二頁参照）

明治一八年（一八八五）一月二七日、県令第四号をもって学区制が敷かれ、弘前市内は次の五学区に編成された。

- 第一学区（朝陽） 本町 在府町 相良町 元大工町 森町 覚仙町 塩分町 上白銀町 元長町 茂森町 西茂森町 茂森新町 古堀町 古堀新町 北新寺町 新寺町
- 第二学区（大成） 土手町 品川町 山道町 住吉町 新品川町 鍛冶町 新鍛冶町 北川端町 桶屋町 銅屋町 南川端町 松森町 椿町 新椿町 富田町 富田新町 紙漣町（以上一七カ町）
- 第三学区（和徳） 代官町 緑町 植田町 費町 南瓦ヶ町 北瓦ヶ町 上瓦ヶ町 中瓦ヶ町 徳田町 南柳町 坂本町 田代町 西川岸町 徒町 徒町川端町 山下町 南横町 和徳町 北横町 茶畑町 茶畑新町（以上三二カ町）
- 第四学区（時敏） 親方町 百石町 百石町小路 一番町 東長町 元寺町 鉄砲町 上鶴師町 下鶴師町 元寺町小路 下白銀町 箕森町 長坂町 蔵主町 大浦町 田町 田茂木町 彌宜町 若党町 小大町 春日町 馬喰町 亀甲町（以上二三カ町）
- 第五学区（城西） 鷹匠町 馬屋町 西大工町 新町 駒越町 平岡町 紺屋町 浜ノ町 袋町 五十石町（以上一〇カ町）（『小学校現場の百年』千葉寿雄 津軽書房 昭和五〇年 一〇二～三頁）

『青森県教育史 第三巻』四七五頁。

同右書 四六六頁。

進修小学校は中津軽郡所在。明治二〇年（一八八七）四月に西田、百田、堅田、俵元の四小学校が統合して校名を改称。現在の城東小学校。（『弘前市教育史 上巻』五三六頁）

『弘前市教育史 上巻』四九二～三頁。

『文部省第十七年度』「地方視学」七三頁。

『青森県教育史 第三巻』四七七頁。

文相森有礼は、子弟を学校に就学させるのは父兄（後見人）の子弟に対する、また国家に対する義務であるということ、および親子の「親愛恩義ノ情」といった点からも授業料制度を至当のものであると考えていた。次の如き演説を行っている。

「蓋し此度授業料ノ徴集スル事ヲ定メタルハ、父兄（或ハ後見人）タル者其子弟第二対シテ教育ヲ受ケシムルノ義務アルノミナラズ、亦国家ニ対シテモ其子弟ヲ教育スルノ義務アルコト勿論ナレバ、子弟教育ノ費用ヲ、父兄ニ於テ負担スルコト固ヨリ当然ノ事ナリ認定シタルニ由レリ、而シテ為ニ親子ノ間ニ親愛恩義ノ情ヲ厚クセシムルコトモ亦以テ期スル所ナリ」（『九州巡回中郡区長に対する演説 明治二〇年二月』「森有礼全集 第一巻」四九九頁）

「通牒」の全文は次の如くである。

「学齡児童ノ單身他町村寄留ノ場合ニ於ケル就学上ノ取扱ハ往々区々ニ涉リ為メニ或ハ保護者ヲシテ児童就学ノ義務ヲ果サシメサルニ終ル嫌モ有之哉ニ被存候条自今左項ニ拠リ御取扱相成此段及通牒候也
明治二九年一月十三日
小県郡役所第一課 四

丸子村長依田孫十殿

（一）学齡児童ヲ就学セシムル資力ナクシテ子守奉公又ハ職工見習等ノ為甲村ヨリ乙村ニ児童ヲ單身寄留セシムル場合ニアリテハ子メ甲村長ヨリ就学ノ猶予若クハ免除ノ許可ヲ受ケシムベシ

（二）保護者ノ資力ハ児童ヲ就学セシムルニ足り又其他ニ就学ノ猶予若クハ免除ヲ与フルノ事故ナキモノニシテ児童ヲ單身他ニ寄留セシムル場合ニ在リテハ明治廿五年に県令第十一号第一條ニヨリ保護者代人ヲ立テ必ス就学ノ義務ヲ果サシムベシ

（三）学齡簿ノ取扱ニ就テハ甲村ニテハ出寄留届ヲ受領スルト同時ニ学齡簿中其児童ニ関スル欄内適宜ノ場所ニ朱書若クハ附箋ヲ以テ其事由ヲ明記シ置キテ学齡人員中ヨリ除キ又乙村ニテハ入寄留届ヲ受領スルト同時ニ之ヲ学齡簿中ニ加ヘ就学不就学ニ関スル事故ヲ相当欄ニ記入シ学齡人員中ニ加フベシ

（四）学齡簿記入上必要ノコトハ甲乙村長間ニ於テ互ニ通知若クハ照会スベシ」（『長野県教育史 第十一巻 史料編五』三〇二頁）

（昭和六〇年十一月五日受理）